

論説的文章における接続詞について

—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較—

浅井 美恵子

キーワード 接続詞、論説的文章、連接、接続詞の使用、順接

1. はじめに

日本語教育の場では日本語学習者に対しさまざまな作文を課しているが、特に上級日本語学習者はレポートや論文、提案書などの論説的文章を作成することが求められる。論説的文章は「論理を展開し、主張を説きあかす文章」(市川 1978:37)と定義されており、日本語教育の作文指導において、この論説的文章の言語的特徴を取り上げることは重要であると思われる。論説的文章の言語的特徴には語彙や文の接続関係、文章構造などいろいろあるが、本稿では文の接続関係を示す接続詞について日本語母語話者と日本語学習者の使用の相違点を分析、考察する。日本語学習者に見られやすい不自然な表現を指摘することで、日本語学習者が現実に論説的作文を行う際の指針を示すことができるのではないと思われる。

2. 先行研究

2-1 文の連接と接続詞

文章内の文と文をつなぐ形式を「文の連接」といい、これまでも日本語の文章の首尾一貫性を示す指標の1つとして、分析されてきた。市川(1978)では、文の連接は主に接続語句と指示詞の2つでなされ、文脈の展開に重要な役割を持つとしている。ここで接続語句とは、接続詞、接続詞的機能を持つ語句、接続助詞、接続助詞的機能を持つ語句のことで、これらは文と文、あるいは節と節の論理関係をさまざまに示し、前後を接続する。文の連接にはこの他に指示語や同一語句、文末表現なども用いられるが、接続語句は文章内部の論理関係を端的に表している文の連接であるといえる。市川(1978)では、文と文がどのような論理関係でつながれているかを「連接関係」とよび、それを8

つの類型に分類している。以下にその8類型とそれぞれに含まれる接続詞の例を示す(表1)。

表1 市川(1978)の文の接続関係の8類型

順接型	全文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型。 だから・それで・そこで・そのため・すると・その結果 など
逆接型	前文の内容に反する内容を後文に述べる型。 しかし・けれども・だが・それなのに・ところが・それが など
添加型	前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型。 そして・それから・それに・さらに・しかも・また など
対比型	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型。 いっぽう・逆に・それとも・または・あるいは など
転換型	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型。 ところで・さて・では・ともあれ・それはそうと など
同列型	前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型。 すなわち・つまり・要するに・せめて・とりわけ など
補足型	前文の内容を補足する内容を後文に述べる型。 なぜなら、というのは、だって、なお・ちなみに など
連鎖型	前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型。

この中で、連鎖型では普通接続語句は用いられない。

接続語句の1つである接続詞は文と文の論理関係を担う形式であるが、文の接続関係は常に明示されるわけではなく、文と文の間に接続詞を入れなくてもよい場合がある。接続詞には省略できる補助的用法のものと必ず必要な必須的用法のものとがあり、「また」「そして」「一方」「それとも」「すなわち」「つまり」などは補助的用法としての傾向が強く、「ところが」「しかし」「そのために」「だから」などは必須的用法としての傾向が強いと考えられている。^①市川は、接続詞を多く用いると、論理的に整えられるが、その反面、描写性が薄れて説明調になったり、簡潔さが失われたりする場合もあると指摘している。

田中(1984)でも、文や語句を一定の意味関係・論理関係のもとに結びつけて、文脈や話線を展開していくうえで、接続詞や接続助詞の類が重要な役割をになっているとされている。単なる文の羅列でも意味が通じるが、その場合受け手に論理構成を委ねており、受け手の側が正確に論理構成ができない場合には誤解されてしまう。接続詞や接続助詞を使うことで、受け手に誤解されず論理構成を明確にすることができるとしている。また、書きことばと話しことばのみならず、文章の場合、手紙・童話・新聞・評論・公文文など、文章ジャン

ルによって用いる接続詞が決まってくることも指摘している。田中（1984）では、接続の機能を3種に分類している。以下にその機能と分類される接続詞を示す（表2）。

表2 田中（1984）の接続の機能の分類

対等の接続	さまざまな意味あいでも語句を並べ立てる。 そして・また・さらに・しかも・つまり・すなわち など
承前の接続	前件を前提ないしは先行条件として、後件に結びつける。 すると・それから・ならば・でなければ・だから・なぜなら・しかし・でも・ところが・たとえば など
転換の接続	それまでの文脈や話線を断ち切って、新しい話題を切り出す。 とにかく・ともあれ・さて・ところで・それで・では など

伊藤・阿部（1991）では、実験的な方法を用いて接続詞の分類をしている。大学生30人に2文の文章を45種与え、それぞれ接続詞は必要かを7段階評価させ、さらに2文間に適切であると思われる接続詞は何かを選ばせた。そして、クラスター分析によって交換可能性の高い接続詞をまとめ、分類した。その結果、接続詞は表3で示されるような6つの類型に分けられた。また、この類型の中では「反予想型」と「順接型」の接続詞が特に高い必要性を持つという結果が得られている。

表3 伊藤・阿部（1991）の接続詞の分類

反予想型	もっとも・ただし・でも・ところが・だが・しかし など
確認型	ようするに・つまり・すなわち・なぜなら・とにかく など
順接型	それで・そこで・だから・そのため・したがって・すると など
新話題型	では・それでは・ところで・さて・たとえば など
累加型	それから・そして・しかも・さらに・また・いっぽう など
対比型	それとも・あるいは

これまでの伝統的な分類では接続詞を機能によって分類しているが、伊藤・阿部（1991）の分類では同じ文間で使えるかどうかによって分類している。たとえば、伝統的な分類では「もっとも」「ただし」という接続詞と「なぜなら」という接続詞は「前文を補足する内容の文を後文に述べる」という機能を持っているとして1つの類型にまとめられる。しかし、伊藤・阿部（1991）では実

際に同じ文間で用いられることが少ないため、「もっとも」「ただし」と「なぜなら」は別の類型に分類している。読み手は接続詞を読むことによって後文の内容をある程度予期していると考えられる。文間で交換可能な接続詞の間では、それらの接続詞によって読み手が行うであろう予期も類似している可能性があり、この分類はこの予期の類似性を反映した分類だと伊藤・阿部では考察されている。

以上のように、これまでの研究ではさまざまな接続詞の分類が提案されていて、どれが日本語教育に役立てられる分類かということは一概に決められない。しかし、文章の論理関係を読み手に明示する役割を接続語句が担っており、中でも接続詞が文と文の関係を示していることは明らかである。接続詞の使用を見ることで、書き手が用いている論理関係や設定している文章ジャンルを知ることができると思われる。

2-2 接続詞の使用の分析

実際に用いられている接続詞の使用頻度や文章ジャンルに特徴的な接続詞の種類を分析した研究もされてきている。土肥(1992)では、日本語の文字言語資料と音声言語資料の接続詞を分析している。文字言語資料では逆接「しかし」、添加「また」が多く用いられ、自然科学分野の資料では順接「したがって」が多く用いられていると言う結果を得ている。また、西(1995)では、新聞社説に現れる接続詞と接続詞的な機能を持つ語句の出現率を調査している。文章全体における接続表現を持つ文の出現率は、総文数の15.89%で、接続類型別の出現傾向は「逆接型」「添加型」「順接型」²⁾の順になっている。

これらの日本語母語話者の文章における接続詞の分析をもとに、日本語学習者の接続詞の使用を見ていき、そこに現れる特徴を見出すことには意義があると思われる。そのため、今回は日本語母語話者と日本語学習者の書いた作文に現れた接続詞を分析し、日本語学習者の接続詞の使用に特徴があるのかを見ていく。

3. 分析

3-1 対象

本研究では、日本語母語話者(以下母語話者とする)30名と日本語学習者(以下学習者とする)32名に「ゴミ問題の現状と解決法」というテーマを与え、800字程度の作文を書いてもらった。母語話者は全員文科系を専門とする大学院

生である。学習者は日本語能力試験1級に合格している中国語母語の学習者で、それぞれ自国あるいは日本で2年半以上の日本語学習経験がある者である。被調査者は日本語でレポート・論文を書く必要があり、母語話者については既に論文を書いた経験があること、学習者についてはレポート・論文を書く能力と機会のあることから選んだ。

作文には内容と目的の制約として、「ゴミ処理のコスト」「埋め立て地」というキーワードを設定し、授業のレポートとして書くことを指示した。時間的な制約はしなかったが、全ての被調査者が2時間以内で作文を完成することができた。

3-2 分析の枠組み

母語話者と学習者の作文内の文頭に現れた接続詞を取り出し、その数を調べ、接続の機能類型ごとに分類した。接続詞は前後の文との関係を示し、省略しても前文・後文の内容が変化しない語句とし、³⁾これに当てはまるもの全てを対象とした。接続の機能類型は市川(1978)の類型をもとに分類した。⁴⁾市川(1978)の分類は土肥(1992)、西(1995)など接続詞の使用に関する先行研究で採用されているため、今回もそれにならった。

機能類型だけでは接続詞の使用傾向が見えにくいため、接続詞ごとにその数と使用頻度を調べた。

4. 分析結果

接続詞は日本語母語話者の作文に118例、総文数の22.87%の文に見られた。日本語学習者の作文には154例、総文数の24.92%の文に見られた。学習者の方が接続詞を多く使っているといえる。西(1995)の調査結果に比べ、接続詞の使用文率はやや高かった。

市川(1978)の類型に従って分類した結果(表4)、母語話者では添加型(46.6%)、逆接型(25.4%)、同列型(11.9%)の順で多く使われていたのに対し、学習者では添加型(34.4%)、逆接型(20.1%)、順接型(16.9%)の順であった。順接の接続詞は母語話者5例、学習者26例で、使用頻度の違いが顕著に見られた。

(1)ドイツも日本と同じく敗戦から経済・産業を飛躍的に発展させていったのであった。そしてその弊害としてのゴミ問題は深刻であった。(日本語母語話者[以下J]:添加)

(以下下線は筆者による)

(2)私たちが住んでいる地球が一つだけで、土地を無限に増加することが無理だ。だから、ゴミの捨て場がだんだんなくなるかもしれない。(日本語学習者 [以下C]:順接)

(3)そして、できるだけリサイクルできる商品を使う。そうすれば、ゴミ問題をすこし解決することができるかもしれない。(C:順接)

表4 接続詞の接続類型別総数

接続関係	J	C
順接	5 (4.2%)	26 (16.9%)
逆接	30 (25.4%)	31 (20.1%)
添加	55 (46.6%)	53 (34.4%)
対比	1 (0.8%)	3 (1.9%)
同列	14 (11.9%)	25 (16.2%)
転換	10 (8.5%)	6 (3.9%)
補足	3 (2.5%)	9 (5.8%)
その他	0 (0.0%)	1 (0.6%)
合計	118 (100.0%)	154 (100.0%)

接続詞別の使用数を見てみると(表5)、母語話者、学習者ともに添加の「また」、逆接の「しかし」が多く使われており、大きな違いはなかった。これは土肥(1992)の結果と一致している。

(4)有料化することでゴミ減量が確実に達成されるだろう。またリサイクルしやすい商品の奨励をすることも有効であろう。(J)

(5)その後、全国的な規模で、ゴミ問題をめぐっているいろいろな処理方法によって取り込んできたそうである。しかし、ゴミ問題についての処理はすべて完璧とはいえない。(C)

母語話者と学習者の使用頻度に差があり、母語話者の使用頻度が高いのは添加の「さらに」、逆接の「だが」、転換の「では」であり、学習者の使用頻度が高いのは添加の「しかも」、順接の「だから」、同列の「たとえば」であった。

(6)さらに、製品の規格を統一することで、リサイクルが容易になる。(J)

(7)だが、ゴミは、自分の外にだすものだからこそ、他人の領域をおかしかねない。(J)

(8)ではこのゴミ問題をどのように解決していくべきだろうか。(J)

(9)しかも、人の住んでいる所が近ければ近いほど汚染防止のためのコストが上がる。(C)

(10)だから、ゴミの捨て場がだんだんなくなるかもしれない。(C)

(11)例えばプラスチック製品の氾濫はその代表である。(C)

表5 接続詞別の使用数

接続詞	J	C		J	C		J	C
したがって		3	あと		1	けっきょく	1	
そうしたら		1	さらに	5	1	すなわち	1	3
そうすると		2	しかも	1	5	たとえば	8	15
そうすれば		2	そして	8	8	つまり	4	6
そうなれば	1		そのうえ		1	ようするに		1
そこで	1	3	それに		1	同列型	14	25
そのため	1	2	だい1に	2	1	ただし		2
それで		3	だい2に	2	1	というのは		2
だから		7	だい3		1	なぜかというと		2
だとすれば		1	つぎに(は)	2	3	なぜなら(ば)	3	3
であるから		1	まず	10	10	補足型	3	9
となれば	1		まずだい1に	1		またいっほう		1
ならば	1		また	24	20	その他		1
ゆえに		1	添加型	55	53	合計	118	157
順接型	5	26	いっほう	1	2			
が		1	または		1			
けれども	1		対比型	1	3			
しかし	20	24	いじょう	2				
しかしいっほう	1		さて	1				
しかしながら	1		それでは	1				
だが	6	2	では	6	3			
けれど		1	ところで		3			
でも		2	転換型	10	6			
ところが	1							
にもかかわらず		1						
逆接型	30	32						

また、学習者の方が様々な種類の接続詞を用いている。母語話者は30種類、学習者は42種類の接続詞を用いていた。特に順接型では学習者が多種の接続詞を用いていた。

5. 考察

今回の調査では、学習者の方が文と文のつながりに接続詞を用いることが多く、文の論理関係を明示的にしていることが分かった。学習者の接続詞の使用数が多く、接続詞の種類も多い理由は、母語話者では接続詞を使わない場合でも学習者は接続詞を使うためだと思われる。母語話者、学習者ともに西(1995)の調査より総文数に占める接続詞使用文率が高かったのは、新聞社説では紙面の制限からできる限り補助的用法の接続詞は省く傾向があるのに対し、今回の調査では字数制限がなく、書き手が接続詞を自由に使うことができたためと思われる。

また、母語話者の類型別の出現傾向も西(1995)と一致せず、順接型の接続詞が少なかった。市川(1978)では順接型・逆接型の接続詞を2つの事柄を論理的に結びつける関係、添加型・対比型・転換型を2つ以上の事柄を別々に述べる関係、同列型・補足型を1つの事柄に関して拡充して述べる関係としているが、母語話者では論理を積み重ねて文章を展開していく方法より、ある事柄を拡充して展開していく方法を接続詞を用いて示す傾向があるのではないかと思われる。これに対して、学習者では文章を論理的な関係をはっきりわかるように示していると思われる。これを明らかにするためには、接続詞が現れない文間の接続についても調べる必要がある。

接続詞別に見ると、補助的用法の傾向が強い「また」「そして」「つまり」のうち、「また」は母語話者、学習者ともに多く用いていたが、「そして」「つまり」は学習者の方が多く用いていた。他の方法で文と文のつながりが示されていて、接続詞がなくても読み手が接続関係を把握できるところに補助的用法の接続詞が使われるのだが、学習者では補助的用法の接続詞も省略せずに使う傾向があると思われる。補助的用法の接続詞の使用は、接続関係をより明確に示すことができるが、文章の冗長さを引き起こすこともあると考えられる。冗長かどうかは言語的直感によって判断されるため、学習者では補助的用法の傾向が強い接続詞を用いる際により注意すべきであろう。

学習者では「そうすれば」「そうしたら」などの条件―帰結を示す接続詞が多く見られた。

(12)そして、できるだけリサイクルできる商品を使う。そうすれば、ゴミ問題をすこし解決することができるかもしれない。(C)

(13)それは人間はできるだけゴミを作らないということである。そうしたら、ゴミの量は最低限におさえることができ、ゴミを処理する時も楽である。(C)

これは、浅井(1999)で示した副詞節の場合と同様に、学習者は条件—帰結の展開をよく用いていることを示しているといえる。1つの論理展開を多く明示することが読み手の印象に影響を与えるかどうかは今後さらに調べていく必要がある。また、佐久間(1996)にも指摘されているように、接続詞と接続助詞の対応関係と用法の違いはあいまいであるため、他にも接続助詞と接続詞の使用に共通点が見られる可能性がある。

また、「だから」「だけど」「でも」などの主に話し言葉に用いられる接続詞は、学習者は用いているが母語話者は用いていない。

(14)だから、今は深刻な問題になる。(C)

(15)だけど、地球の将来、子孫のため、一番大事なものは、個人をはじめ、日常生活からやりなおさらなければいけないと思う。(C)

(16)でも、日本と違うのは家庭から出すゴミは分類されていません。(C)

これらの接続詞は書きことば、特に論理的な文章では避けられる。このような文体差・文章ジャンルの差も、学習者が作文する際には注意していく必要があると思われる。

さらに、学習者の接続詞の使用には、教育の影響が考えられる。学習者では「だから」「そして」「しかし」などの比較的早い段階で学習する接続詞の使用頻度が高くなっている。学習の早い段階で導入された項目は話し言葉、書き言葉ともに用いることができるため、学習者が使いやすいと考えられる。それに対し、母語話者の使用が多かった「さらに」「だが」などの接続詞は使用範囲に制限があり、学習者にとっては誤用を犯しやすく、あまり用いられないと考えられる。上級日本語学習者では接続詞を含めた文章ジャンルに適した語彙・文型の指導を行っていく必要がある。

6. まとめ

今回は接続詞の使用から日本語母語話者と日本語学習者の文章の特徴を見てきた。論説的な文章の言語的特徴をさらに明らかにするために、今回得られた課題を調査していくとともに、指示詞など接続語句以外の首尾一貫性に関連す

る言語的特徴を調査すること、論説的文章の言語的特徴と文章構造の関係を明らかにすることが必要であると思われる。実際に論説的文章を書いていく上で注意していくべき言語的要素を取り出し、自己推敲の指針としてまとめていきたいと考えている。日本語母語話者と日本語学習者とを比較することで、両者に共通して注意すべきものと学習者が特に注意する必要があるものを分けてまとめたい。そうすることによって、日本語教育のみならず国語教育にも役立つようなものになるのではないかとと思われる。

<注>

- (1) 市川 (1978) pp.78-79
- (2) 西 (1995) では、市川 (1978) の類型で分類している。
- (3) 岩澤 (1985) を参考に定義した。
- (4) 8 類型の中で接続表現を含まない「連鎖型」は省いた。
また、接続詞の誤用は 3 例あったが、分析から除外した。

<参考文献>

- 浅井美恵子 (1999) 『上級日本語学習者の作文における複文・重文構造について』名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻修士論文
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 市川保子 (1998) 「接続詞と外国人日本語学習者の誤用」『九州大学留学生センター紀要』9 pp.1-18
- 伊藤俊一・阿部純一 (1991) 「接続詞の機能と必要性」『心理学研究』62-5 pp.316-323
- 岩澤治美 (1985) 「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56号 pp.39-50
- 佐久間まゆみ (1983) 「文の接続—現代文の解釈文法と連文論—」『日本語学』2-9 pp.33-44
- (1996) 「文の文法と文連続の文法—文章の文法への志向—」『日本語学』pp.32-40
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法第4巻修飾句・独立句編』明治書院
- 土肥治美 (1992) 「公的な談話と論理的文章に表れた接続語句」『名古屋大学日

本語学科日本語教育論集』3号 pp.35-49

西由美子 (1995) 「新聞社説における接続表現の出現傾向」『国文目白』34 日
本女子大学国文学会 pp.85-93

